CATCH the NEW !

REGGAE SUNSPLASH '94

レゲエ史上最大のフェスティバル。

強力な顔ぶれで今年も日本上陸！

1978年。ジャマイカの首都キングストン郊外に、ボブ・マーリーをはじめとする全てのレゲエ・ミュージシャンが集まり大々的なコンサートが開かれた。その後、このイベントは年々その規模を拡大し、現在では毎年一週間にも渡って繰り広げられるカリブ海最大、そして世界最大のイベントにまでなった。これがレゲエ・サンスプラッシュである。ここ日本ではレゲエ人気も既に定着。夏には数多くのレゲエ・イベントが各地で行なわれているが、このレゲエ・サンスプラッシュこそが、世界に唯一共通するレゲエのフェスティバルなのである。今年もまた、その季節がやってきた。そしてこの1994年は、レゲエ・サンスプラッシュが初めてワールド・ツアーに出てからちょうど10年目という、記念すべき年でもあること

から、過去3回の日本公演をさらに上回る、メンバーとステージが今から期待できそうだ。今年の強力なラインナップはグラミー賞に輝く2大バンド、スティール・パルスとインナー・サークルを始めシェリー・サンダー、ジュニア・タッカー、ユー・ロイ、ジュニア・リード、シャイン・ヘッド、そして今年の大目玉として現在ビルボードチャートを賑わしているビッグ・マウンテン。ウィノナ・ライダー主演映画「リアリティ・バイツ」の挿入歌「BABY I LOVE YOUR WAY」がヒット中だ。そして最後の大物といえばこのひと、5月に来日公演を終えたばかりのマキシ・プリーストも参加することが決定した。日程は次の通り。

8月21日（日）
12：00PM開場／1：30PM開演
池田市猪名川総合運動公園・特設会場
S¥6500（税込・ブロック指定）
A¥6000（税込・自由）
※雨天決行
〈チケット販売〉
チケットぴあ☎06・363・9999
〈チケット取り扱い・問い合せ〉
H・I・P大阪☎06・362・7301

スピッツ　インタビュー

お汁粉の中の塩みたいなものを追求していきたいですね

ボーカルの草野マサムネの書く普通の言葉なんだけどちょっと侮れない歌詞、心に残るギターのメロディが印象的なスピッツ。今月21日にはシングル『青い草』がリリース。今週には大阪ウォーホールでのライブも行なわれる（ソールドアウト）。今回なんとニューアルバムのレコーディング真っ只中という時期に草野マサムネにインタビュー。

ー　レコーディング中だそうですがどんな感じになりそうでしょうか？歌詞とか。

「う～ん。一言で言い表せないから歌詞にするっていうのは言い訳がましいですけど（笑）『クリスピー！』なんかは天の邪鬼な目で見た恋愛とか多分にあったんですけどもっと、歪んだもの程気持ちいいというような（笑）」

ー　そういう屈折したものをどんどん肯定していくって感じですか？

「肯定というか賛美するって感じですね。当たり前のものって残らないじゃないですか。ちょっと歪んでたりするものって強いインパクトを残すし快感になったりもするだろうし。そういうとこを追求していきたい気がしますね。簡単な例えで言うとお汁粉の中に塩が入って何故旨いか。その塩について歌っているような歌にしたい（笑）。小豆の質とか餅がどうかについて歌ってる人達はいっぱいいるけど何故塩が旨いかっていうことについて僕らはやりたいなっていう（笑）ま、全体のイメージで感じとってほしいですね」

ー　それはずっと一貫してありますよね？

「最近は歌詞にストーリー性が出てきたんで少しづつ聞いてくれる人も増えるといいなって思ってるんですけどデビュー当時は言葉遊びの面白さにこだわっ

The THRILL　インタビュー

集団的な個人戦によるスリル流ポップス

デビュー以来本誌も熱い視線を送り続けて来たスリル。彼らの3rdアルバム「ファンキー・ビジネス」はライブでの興奮といかがわしさを今迄以上に感じさせ、より音の幅を広げた雑食性に富んだ作品に仕上がっている。今回は、最近マッド・コンダクター式田純を抜いてライブでの注目度No.1、セクシーなサックス奏者、YU・KA・RIさんのバンド状態な時も目にしますが。

ー　近頃はYUKARIさんにインタビュー。

「違うんですよ。TVなんかだとカメラ割りの加減でそう映っちゃうこともあるから仕様がないの。CDでは私一人でコーラスやってる曲もあるけど」

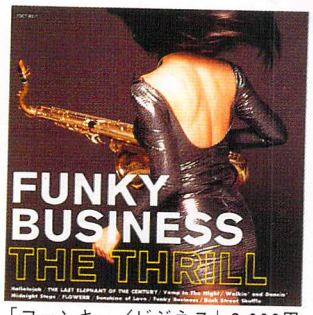
ー　ライブでも初期の頃に比べるとYUKARIさんにスポットがよく当たる。

「それもライブの一断面ですね。でも思うに人数多いでしょ？しかも統率力のある人でなく、それぞれが一国の主みたいな人ばかりの中だから最初の頃のライブってもう怒涛。誰かが前に出れば全員が出て、一人が帰ると皆オーって戻るという（笑）。それはそれでパワーあるんだけど最近はやっとユニゾンという形を残しつつも集団的な個人戦が上手くなったんでしょうね。それとボーカルのいるバンドって目のやり場があるでしょう、例えボーカルのファンじゃなくても。式田さんがいる場面では式田さんがボーカルの役目をしてくれるけどいつも居るわけじゃないし。今はその辺のバランスが上手く取れてきたんでしょうね」

ー　で、この間メトロに来てらした時のエピソードってあります？

「全身網タイツに黒のブラジャーって格好で踊ってたんですけどポロってブラジャーが取れちゃって（笑）。来てなかったメンバーには内緒にしてたんだけど何故かバレちゃってポロリちゃん！なんて言われましたね（笑）」

協力／dbミュージック　東芝EMI



「ファンキー／ビジネス」3,000円（税込）／東芝EMI

The ESCALATORS　インタビュー

私達のやるべきことは、いい曲を作り歌うこと

SIKEN率いるチャンス・レーベルから注目の、エスカレイターズがデビュー。そのグローバルな感覚を持ったファンキー・サウンドは、UKニュージャズ・シーンを代表するブランニュー・ヘビーズ辺りのグルーヴを感じる。とりわけVOズーコのソウルフルな声は、日本のクラブ・ミュージックの可能性を十二分に確認させてくれるような頼もしさがある。てことで今回ズーコにインタビュー。

ー　ズーコさんが一番影響受けた音楽って何でしょう？

「ゴスペルですね。ブルースとかやって来たけど、ゴスペルってすごいパワーあるでしょう。私クリスチャンじゃないんだけど信じてるんだよなんてとこが伝わってきてジーンとしちゃうんですよ。何でこんなに強いんだろうって。そんなに強く歌えることって自分ではこれ迄なかったし。神様は本当にいるのよって歌ってるでしょう、私なんかクリスチャンじゃないし本当にいるのかなって考えながら歌っちゃうけど」

ー　スピリチュアルさにグッと来る？

「もう若鶏って感じで鳥肌立っちゃいますね。恋愛の歌にしろ楽器でも伝わるけどそういうのってやっぱり歌にしか出せないものですよね。そういう風に歌いたいです。だから次のアルバムでは日本語で歌うつもりだし」

ー　アルバムのタイトルでもある『アンモナイト』はDJジェイムス・ヴァイナーさんが作詞ですが、ラブソング的だけどクラブのりがわかった詞ですよね。

「そうですねクラブの人に言ってますね。日本のクラブの人は“さあどんな音楽をやるのか聞かしてもらおうか”って感じで踊んなかったりするでしょう。ロンドンでもライブやったんですけどそんなんじゃなかった。最近は勉強のためにメジャー系の人のライブも見たりしてるんですけど、クラブの人ってファッションから入るでしょう。でもメジャーのファンの人ってそういう人もいるけど本当に音楽が好きなんですよね。だからそういう風にはなっていきたいですね」

ー　次のアルバムの歌詞はどんな風に？

「等身大の私が出てると思います。ラブソングとか考えてることとか。チャリティとかしちゃうミュージシャンいるけどそれはお手軽な自己満足にしかならないから私はしたくない。簡単に社会批判もしたくない。そうじゃなくて私のすべきことっていい曲歌ってそのお金でスタジオ作って働くとこを与えてあげるとか、そういうことなのかもしれないと思うんですよ」

協力／大阪アソシエイツ、日本コロムビア

CATCH the NEW!

※先着10名の方にスピッツのバッジを差し上げます。宛先はフェイム『スピッツ・バッジ』まで。

てたんですけど」

ー　曲的には？またストリングスは結構入るんですか？

「『クリスピー』よりは入らないようにしようと思ってます」

ー　じゃあ基本に立ち戻る感じで？

「そうですね」

KONTA　インタビュー

居心地の悪いいびつな少年の放つ俺の言い分、お前のｅｖｅｎ

２ｎｄアルバム「ｅｖｅｎ」を発表したコンタこと、近藤敦。バービーボーイズ解散後ソロとしての第2弾に当たる今作。コンタが生まれてこのかたずっと感じ続けてたという居心地の悪さを、30代という、彼いわく年齢的にいなせと粋の境界に位置するという彼自身のｅｖｅｎと"言い分"の掛け言葉でもあるこの作品について、ＫＯＮＴＡにインタビュー。

ー　最初からＥで始まるタイトルにしようと決めてた、とか。

「1枚目がＦだったから」

ー　なんで最初がＦだったんでしょうね。

「ちょっといじわるな気持ちがあったんだよ」

ー　所謂フォーレターワーズですか？

「そう。Ｆで始まる4文字言葉にしようと思っただけなのね」

ー　コンタさん自身の曲解説によるとタイトルの「ｅｖｅｎ」には"言い分"というだじゃれともとれる言葉の中に色々な意味が集約されているようですが。

「あのご挨拶の、俺の言い分、お前のｅｖｅｎというのは、受け手側と対等な関係を築きたいなって。無反省に受け入れられるのでも最初から拒絶されるのでもなく、ま、聞いた上で嫌いになるんだったら俺も文句は言わないさ！っていうこと。だから（あの解説は全部やっておこうという根本的な姿勢みたいなものです」

ー　そこには、コンタさん自身の今の年齢の居心地の悪さみたいなもののエクスキューズがされてましたけど。

「居心地の悪さってずっとありましたよ。幼稚園の頃から。でもそういう居心地の悪さって持ってるべきだと思うし、否が応にも俺自身はそういう性格だし育ち方をした人間だからさ」

協力／ｄｂミュージック、ビクターエンターテインメント

「ｅｖｅｎ」3,000円（税込）／ビクターエンタテイメント

米屋純　インタビュー

この声だからこそ歌える世界がある

その声に惚れ込んだアマチュアの作詞、作曲家が彼女に楽曲を提供。それがラジオ番組でプロの曲を押し退けてグランプリを獲得し、デビューの直接のきっかけをつかんだ米屋純。ソフトな透明感があり、耳にすんなり馴染むその声は、歌詞の内容がかなりヘビーな恋愛を描いているにも関わらず、決して重苦しさを感じさせない。とはいえ淡々としているだけでない彼女の魅力とは？

ー何か京都での思い出ってあります？

「中学の時の修学旅行で来て、夜宴会場の舞台で中山美穂の曲を歌いましたね。中山美穂が好きなんじゃなくってバラード系が好きだったので歌ったんですけど。本当は久保田利伸が好きなんです（笑）。でもそれが初ステージでした」

ー　ほう。因果っぽいですね。ところでアルバム・タイトル・ソングにしろシングルの『あなたに会いに傷つきに行く』にしろ歌詞がどれもかなり深刻な恋愛の歌ですね。米屋さん自身は歌の中のそれぞれの主人公の心理ってどう思います？

「ちょっと怖いっていうか（笑）よくわかんない主人公もいますけど、私の声ってよく透明感があるって言われるんですけど私だからこそそういうのも歌えるっていうか」

ーそうですよね。あと歌ってる米屋さん自身じゃなく他の人が作詞してるからこそ扱われてるってとこありますね。聞いていて重さが少ないというか。今作はバラードのアルバムですが、今後はどんなものが歌いたいですか？

「久保田が好きなんで、ファンキーなものを歌いたいですね」

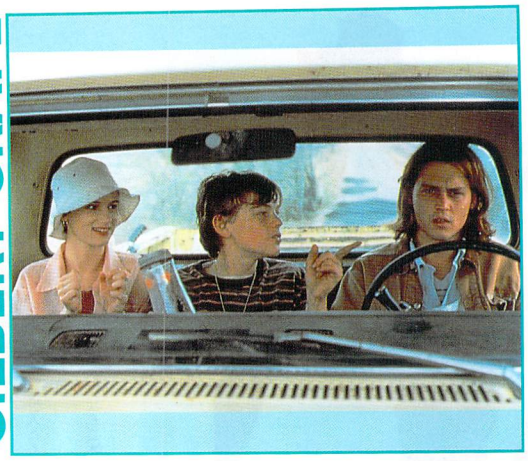
協力／チャンスネットワークシステム、日本コロムビア

「悲しみのよけ方」2，000円（税込）／日本コロムビア

ギルバート・グレイプ

静かな田舎町に吹いた、爽やかな風。優しい人間たちが巻きおこす物語。

「この町での生活は、音楽なしでダンスを踊っているようなものだ」と、生まれてから一度も故郷アイオワを出たことのないギルバート（ジョニー・デップ）。父親亡き後、彼は過食症の母親と口やかましい姉妹、精神障害を持つ弟（レオナルド・ディカプリオ）の面倒を一手に引き受け、スーパーで働きながら将来の夢もなく生きていた。ある日、彼の前にベッキー（ジュリエット・ルイス）という不思議な少女が現われる。『マイ・ライフ・アズ・ア・ドッグ』が大ヒットとなったラッセ・ハルストレム監督のアメリカ進出第2作目。今回も素朴で傷つきやすい人々の心模様を、彼らしい優しい視点で描いている。結構クドい顔なのに『シザーハンズ』『妹の恋人』など何故か繊細な役柄がピッタリはまるジョニー・デップと、『蜘蛛女』で見せたイノセントさに知性をプラスしたような少女を演じるジュリエット・ルイス、この二人の安定感は文句なし。驚きはレオナルド・ディカプリオで、1番若手ながら主演の二人を完全に食ってしまった。誰もがどこかしら風変わりだが、現実味あるキャラクターとして温かく映る。ここがやはり監督の腕前の凄さなのだろう。



GILBERT GRAPE

・7月下旬より公開予定

マーヴェリック

クールになれないギャンブラーと美貌の女スリのロマンティック・アドベンチャー。

MAVERICK

アダルト・ウエスタンのはしりとして、軽快なノリとテンポで一世を風靡した冒険シリーズ『マーヴェリック』が32年ぶりでスクリーンに蘇った。アメリカでは1957年から放映された、いわば昨年の『逃亡者』に続くハリウッドが発見したテレビ黄金期の鉱脈、といったところだが、味付けはもちろん90年代タッチだ。何といっても主演が最近共に監督進出で成功を果たしたメル・ギブソンとジョディー・フォスター。腕に覚えのギャンブラーと美貌の女スリという二人、そこに元祖とも言えるTV版マーヴェリックのジェームス・ガーナーの保安官をからめ、コミカルな駆け引きとドンデン返しの連続、笑いとスリルのペーストたっぷりのロマンティック・アドベンチャーに仕上がっている。そういえば本格コメディ役のジョディは初めて、またメルのクールになれないお調子者ぶりや西部モノの名作『駅馬車』を彷彿とさせるスタント・アクション、と見所も満載。難しいことは抜きにして頭を空っぽにして楽しみたい作品だ。

・8月中旬より公開予定

ロングウォークホーム

人種差別に立ち向かう、ふたりの女性の友情。

達者な口、豊かな表情、と強烈なキャラクターで相変わらず売れっ子のウーピー・ゴールドバーグだが、久々のシリアスタッチで見せるのがこの作品『ロングウォークホーム』だ。1955年のアラバマ。ひとりの黒人女性がバスで白人に席を譲らなかったという理由で逮捕され、それを不当とした5万人の黒人たちが90日間にわたるバス・ボイコット運動を行なった。アメリカ公民権運動の先駆けとなったこの歴史的事件を背景に、ふたりの女性の人生が重なる。よき家庭に恵まれた白人女性ミリアム（シシー・スペイセク）、そして一家のメイドである黒人女性オデッサ（ウーピー・ゴールドバーグ）。身分の違いはあれど、彼らは互いに信頼関係で結ばれていた。人種差別の風当たりがきつくなってゆく状況の中で、それは強い友情へと変わってゆく。人種差別に疑問を持ち、勇気を出して立ち向かおうとするミリアムと、そんな彼女を気使い、しかし自らも決して屈せず戦い抜くオデッサ。銃や暴動で差別を描くのではなく、ごくごく普通の人間たちのあいだに生まれる差別こそ最も深刻で恐ろしいものであることを、この作品は教えてくれる。

THE LONG WALK HOME

・パラダイスシネマにて公開中

つめたく冷えた月

酔いどれ男が見つけた最後の楽園。それは限りなく美しい〈人魚〉だった。

LUNE FROIDE

「こんな風に生きてみたい！」。日々仕事に追われてよれよれになっている男性諸君は、目からうろこが落ちるかもしれない。文壇のアウトサイダーともいえるエキセントリック作家チャールズ・ブコウスキーの短篇を下地とした、クレイジーで、だがある意味では果てしなく純粋な男たちの世界である。中年男のデデとシモン。酒と女をこよなく愛す二人が、酔いどれた末に出会った美しい〈人魚〉とは。原作と同じく、不道徳で鄙猥な俗語が連発される映像の中に、何故か漂う奇妙な崇高さを一体どう表現したらよいだろう。リュック・ベッソン製作の効果か、哀しみをたたえた海の表情はひたすら澄みきって清らかだ。なおかつ全体的にユーモアまで漂うのは、スクリーンをつんざく如く全編に流れるのがジミ・ヘンドリックスであったり、星空の下に響くのがプロコル・ハルムの「青い影」だったり、男たちが飲むビールがバドワイザーであったりと、彼らのライフスタイルをアメリカへのオマージュたっぷりに描いているからであろう。監督、そしてデデ役で主演もしているパトリック・ブシテーの、愛すべき飲んだくれ男ぶりも切なく心地よい。

・7／30よりシネマヴェリテにて公開中

EVENT

ガラナ・ナイト〜ポップVS歌謡曲

最高にガレージなバンド、デキシード・ザ・エモンズが京都へやってくる。

80年代、突如として起こった“ネオGS”ブームを憶えているか？現在ではそんなかつてのGSも様々な側面から見直され海外のガレージ・ロック・ファンからも注目を浴びるなど、決してパロディという視点ではなく最高に熱くヒップな音として、受け入れられ始めた。その新世代の先陣を切るのは誰かといえばこのバンド、デキシード・ザ・エモンズだ。彼らが京都にやって来る。場所はメトロ。その他の出演はタイムストッパーズ・エキストラ、サウンド・バビッチ、リッキー、ルルーズ・マーブル、そしてアポリネール野ばら。おサイケでクレイジーな夜に乞うご期待！

8月17日（水）
OPEN／START 8：00PM
京都・丸太町クラブメトロ
前売・当日￥1500（W／1D）
問・スタック・オリエンテーション
☎075・721・4402

岡本達幸写真集

ジャマイカが、見えてきた。

夏といえばレゲエ。だが日本でのレゲエ人気というのは、関東より関西のほうがダントツに高いらしい。自由で、気楽で、おおらかなジャマイカン・ソウルは、我々関西人の魂にも共通するものがあるのかも?!そんなわけで今年もジャマイカンな夏の風が吹きあれそうな気配だが、ここに紹介するのは、そんなジャマイカの自然と人間の姿を憎いほどに描き出した写真集「KINGSTON LOVE」である。撮影者は岡本達幸。ジャマイカ、ニューヨーク、シチリアと、常に世界に目を向ける著者が、キングストンの街を訪れ、そこに生きる人々をピュアな視線で捕らえたポートレートの数々。この日本にはない、何かが見える作品集だ。

岡本達幸写真集「KINGSTON LOVE」B5版／128頁
2400円（本体2330円）光琳社出版株式会社

ライブ

渡辺香津美&ラリー・コリエル夢の共演。

今や名実共に世界的ギタリスト、渡辺香津美。そして70年初頭にジャズ・ロック・バンド「ザ・イレブンス・ハウス」を結成、その後もアコースティック・ギターでの活躍で大きな話題をさらったラリー・コリエル。共に偉大なアーティストであるだけでなく10数年来の友人でもあるというこのふたりの共演が、遂にRAGで実現する。個性溢れる両者の音楽がどのような融合を果たすのか、是非お見逃しなく。

7月27日（水）開場6：00PM　開演7：30PM
Live Spot RAG（中京区木屋町通三条上ル上大阪町521　京都エンパイヤビル5F）
前売￥5150当日￥6180
〈チケット／問い合せ〉
（株）ラグ・インターナショナルミュージック
☎075・712・5838（朝10時〜夜7時）／Live Spot RAG☎075・241・0446（夜6時〜朝4時半）

LIVE

Club Fame.

即戦力

スクランブル！スクランブル！
力のあるライター
腕におぼえのあるライター
この指令を受け次第、速やかに行動せよ。

スタッフ募集：ライター・セールスプランナー　※経験者にかぎる。
CLUB FAME：075-256-7555　担当　編集部